



Title	自由ヴァルドルフ学校の「演劇教育」に関する研究
Author(s)	広瀬, 綾子
Citation	大阪大学, 2009, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/57696
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【6】				
氏 名	ひろ 瀬	せ 綾	あや こ	子
博士の専攻分野の名称	博 士（人間科学）			
学 位 記 番 号	第 2 3 3 2 8 号			
学 位 授 与 年 月 日	平成 21 年 9 月 25 日			
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 1 項該当 人間科学研究科人間科学専攻			
学 位 論 文 名	自由ヴァルドルフ学校の「演劇教育」に関する研究			
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 藤川 信夫 (副査) 教 授 小野田正利 教 授 平沢 安政			

論 文 内 容 の 要 旨

かつて C. リンデンベルクは、R. シュタイナー（Rudolf Steiner, 1861・1925）の理論を基礎につくられた自由ヴァルドルフ学校の教育実践を公に知らせる著書や論文の少なさを嘆き、「今日のヴァルドルフ学校運動は、どちらかといえば実践者達の沈黙せる運動である」と述べた。しかし、今日、欧米でもわが国でも、この教育への関心が著しく高まり、教育哲学、教育史、教育方法学、キリスト教教育学その他の学問領域から究明の光が当てられるようになった。その結果、ヴァルドルフ学校の教育の基礎をなす人智学、人智学的発達観と結びついた授業論、教師論、宗教教育、外国語教育、気質教育その他が次第に明らかにされてきた。また、ブランゲ（K. Prange）やウルリヒ（H. Ullrich）の研究に見られるように、ヴァルドルフ学校の教育に対する批判的な見解も出され、学問的な解明が進みつつある。しかし、国語教育、理科教育、家庭科教育、歴史教育をはじめとして、ヴァルドルフ学校の教育を構成する諸分野についてはいまだ十分に究明されているとは言えない。本博士論文で取り上げる演劇もまた究明されていない分野の一つである。

「ヴァルドルフ学校では芸術活動が生命の要である」と言われるように、ヴァルドルフ学校の教育の特徴は、絵画、音楽、オイリュトミーなどの芸術活動を教育活動・学習活動の中核に据えている点にある。演劇は一般に「総合芸術（Gesamtkunstwerk）」と言われ、それゆえヴァルドルフ学校では、さまざまな芸術的要素を集約した演劇が、教育活動・学習活動の一環として極めて重視される。ヴァルドルフ学校では演劇が盛んに行われ、演劇が人間教育の一環として担う意義がきわめて重視され、一般の演劇関係者の間でも高く評価されているにもかかわらず、これについては、算数、音楽などの分野と比べて、その研究は端緒についたばかりである。ドイツの代表的な教育学関係の学術雑誌には、ヴァルドルフ学校の教育について論じた研究論文はいくつも掲載されているが、この学校の演劇について論じたものは、皆無である。ヴァルドルフ学校の演劇に関する先行研究は、この学校の教師による活動記録や実践紹介のかたちで、各学年の実際の演劇への取り組みの状況について述べられたものがほとんどであるが、こうした先行研究のいずれもが断片的であり、ヴァルドルフ学校における演劇の理論と実践の特質を総合的・体系的に解明したものとは言い難い。加えて、一般の公立学校で行われている演劇教育との比較によってヴァルドルフ学校における演劇の

特質や独自性を明らかにすることも必要であるが、この種の研究もいまだ見られない。これらの諸課題を念頭に置き、演劇教育の分野について、ヴァルドルフ学校における演劇教育の理論と実践の特質を、シュタイナーの人間観および発達観に基づいて、理論的かつ体系的に解明することが本博士論文の目的である。本研究は、ヴァルドルフ学校の演劇、とりわけ第1学年から第8学年（日本の中学校第2学年に相当）までの演劇教育に主眼をおき、その独自性をも考慮して、この学校の演劇がどのようなものであるかを究明することを目的とするものである。具体的な内容は以下のとおりである。

第一章においては、ドイツの公立学校および私立学校（田園教育舎・オーデンヴァルト校など）の小・中学校段階における演劇教育について概観し、これらの学校の演劇教育の現状および課題を踏まえ、ヴァルドルフ学校の演劇教育とこれらの学校の比較をも取り入れつつ、ヴァルドルフ学校の演劇教育の特徴、独自性を示した。あわせてヴァルドルフ学校の演劇教育の成立・発展の経緯を明らかにした。シュタイナーは演劇についてはさまざまなかたちで言及しているが、演劇教育そのものについては多くを述べていない。ヴァルドルフ学校の演劇教育は、シュタイナーの理論を基にしつつ、後継者の補完および尽力によって歴史的に成立してきたものであり、その成立・発展の経緯を具体的に明らかにした。あわせてシュタイナー自身の演劇活動についても明らかにした。

第二章では、ヴァルドルフ学校の演劇教育の基礎となるシュタイナーの人間観、すなわち人智学的人間観について論じた。ヴァルドルフ学校における演劇教育の基礎をなすのは、シュタイナーの人智学的人間学に基づく人間観である。ここでは、人智学的人間学に基づく人間観とはどのようなものか、さらに人智学的人間学に基づく人間観がどのようなかたちで演劇教育の基礎になっており、どのようなかたちで演劇教育と結びついているのか、について論述した。

第三章では、まずシュタイナーの言語観、すなわち言語がすぐれた教育力を持っているとの見方に立ち、これを使用する当の人間に作用し、その人間の魂に働きかけこれを揺り動かして意欲、感情、思考、想像力その他を活発にする力をもっている、との言語観を明らかにした。さらにかれの言語観とのかかわりで、ヴァルドルフ学校における演劇・クラス劇をとり上げ、演劇の中で言語がいかなる役割を果たし、演劇の中でどのような言葉の学びが行われているのかを考察した。本章では、演劇における言葉の学びを、（1）演劇を構成する言語と身ぶりの関係―言葉と身体活動、（2）言葉と内的体験、の二つの側面から論じ、さらにこうした側面が、各学年のクラス劇の中でどのように考慮されているかを明らかにしている。

第四章では、ヴァルドルフ学校の演劇教育、とりわけ児童期である第1学年から第8学年までの演劇教育を、シュタイナーの人間観および発達観に基づいて理論的かつ体系的に解明した。具体的には低学年、中学年および第8学年において、子どもの発達段階に応じた演劇教育の目的、方法、形態等や演劇の教育的意義などについて明らかにした。すなわち演劇重視の理由、カリキュラムにおける演劇の位置づけ、他の授業との関係性、上演作品の内容、配役の仕方、練習過程、演出者・指導者である教師との関係性、舞台美術・音楽・衣装・大道具・小道具の作成や上演準備の過程などである。また演劇の教育的意義、つまり知的能力の成長への寄与、および道徳性の形成と社会的能力の獲得、クラス共同体の形成と子どもの社会生活能力の育成への寄与などについても言及した。

第五章では、ヴァルドルフ学校で演劇教育を行う教師の養成について論じた。ヴァルドルフ学校でのさまざまな演劇活動を支えるのは、演劇を適切に指導できるこの学校の教師の存在であり、それゆえ、ヴァルドルフ学校にとって演劇を指導できる教師の育成はきわめて重要である。この学校の教師の養成は、シュタイナーの人智学的教育学に基づく独自のヴァルドルフ教員養成大学で行われ、演劇を指導できる教師を育成するため、演劇が必須科目とな

っている。ヴァルドルフ教員養成大学で演劇が重視されている理由の一つは、教師が将来ヴァルドルフ学校で適切な演劇指導を行う能力を身につけるためである。もう一つは、演劇が教師自身の人間形成に大きく寄与するものとして重視されているからであり、学生自らが演劇を体験することによって、演劇が人間形成に働かせる力を実感することがまず大切にされる。ここでは、ヴァルドルフ教員養成大学における演劇教育カリキュラムおよび内容に焦点を当て、演劇の目的、演劇の位置づけ、形態等についてまとめた。

論文審査の結果の要旨

本研究は、20世紀初頭の新教育運動の時期にオーストリアのルドルフ・シュタイナーによって設立され、今日、日本を含め、世界70カ国に合計900校以上が設立されるに至った自由ヴァルドルフ学校において教育の中核を成す演劇教育に焦点をあて、設立者シュタイナーの人間観、発達観、演劇論に関する理論的考察と、学校関係者へのインタビュー等によるフィードバックと研究により、その理論的及び実践的特質を解明しようとする試みである。

序章では、自由ヴァルドルフ学校に関する先行研究を概観し、近年、国語、理科等のヴァルドルフ学校の教育を構成する諸分野に関する研究がようやく開始されたものの、断片的な言及を除き、この学校の教育の中核を成す演劇教育に関する先行研究が皆無であることを明らかにしている。

第一章では、ドイツの公立及び私立学校における演劇教育実践との比較によって、自由ヴァルドルフ学校の演劇教育の特徴を明らかにしている。この章では、ドイツの公立学校、私立学校でも子どもの人間形成やコミュニケーション能力の育成等に対する演劇教育の重要性についての認識から、たしかに演劇教育の実践が行われているが、しかし俳優や演出家などの演劇の専門家と学校教師との連携の欠如、指導方法の一貫性の欠如、子どもの発達段階に対する認識の欠如などの問題を抱えていること、それに対して、ヴァルドルフ学校では、シュタイナーの人智学的人間学と発達論を基礎に生徒の発達段階に即した演劇教育が行われ、また、学校教師自身が演劇教育指導を行えるよう教員養成施設において体系的養成活動が行われていることが明らかにされる。

第二章では、ヴァルドルフ学校の演劇教育の基礎を成すシュタイナーの人智学的人間学について考察される。この章では、シュタイナーの人間学の基礎概念である、「身体」「魂」「霊」について論じ、またそれらの間の関係が人間の成長・発達とともに変化していくことを明らかにしている。

第三章では、演劇教育において言語が特に重要な役割を果たすことから、シュタイナーの言語観及びその教育力について考察される。この章では、言語（言葉）と身体活動、言語（言葉）と内的体験の関係に関する考察から、言語が教育力として作用する条件が明らかにされている。

第四章では、ヴァルドルフ学校の第1学年から第8学年までの演劇教育の実践的特質を、第二章で論じられたシュタイナーの人間学、発達観と関連づけながら、理論的・体系的に論じている。本研究の中核を成すこの章では、児童の発達段階毎に、演出家であり指導者でもある教師との関係、演劇教育の方法及び内容が、人智学的発達観に即して変化していくことを明らかにしている。

第五章では、ヴァルドルフ学校で演劇教育を行う教師の養成について論じている。この章では、シュタイナーの人智学的教育学に基づく独自のヴァルドルフ教員養成大学で演劇が必須科目として位置づけられ、体系的に演劇指導能力の養成が行われていることが明らかにされる。

以上の考察からは、これまで殆ど一般に知られることの無かったヴァルドルフ学校における演劇教育の実際とその理論的基礎が明らかになる。とりわけ、体系的教員養成によって児童の発達段階に即した演劇教育が行われている点がこの学校における演劇教育の特質であると言える。その意味ではヴァルドルフ学校に限らず、同じく人間形成という観点から演劇教育を重視する他の演劇教育実践にも有益な視点を提供しうるものと思われる。

以上から、本論文は博士（人間科学）の学位に相応しいものと判断する。